

The Position of the Japanese Sentence-Final Particles in the Relevance Modality

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河野, 武 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4226

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



日本語終助詞の関連性モダリティにおける位置づけ

河野 武

1. 序

河野（1995）によれば、モダリティは、命題の真偽判断に関わる真偽性モダリティ、発話態度や発話の形式に対する見通しを表す発話モダリティ、および発話の関連性判断ないしは関連性意識の判断を表す関連性モダリティの三種に分けられる。本論では、基本的にこの区別を守りながら終助詞の特徴づけを行う。2節では、先行理論の射程と限界を吟味する。3節では、終助詞を関連性モダリティの枠内に位置づけ、イントネーションとどのように相互作用するか仕組みについて明らかにする。

2. 先行理論の検討

2.1. 終助詞のモダリティにおける位置づけ

国語学の伝統の中で、終助詞が命題とは別個の話者の主観成分を表すという認識は、すでに佐久間（1952）で得られている。佐久間（1952：60-61）は、終助詞の機能は「陳述の内容に関与するものでなくて、伝達の効果（中略）に関与するもの〔現代語の字体への変換は筆者。以下も同じ〕』としている。また、たいていは相手に対する話者の態度に関与するが、時には自分自身に言い聞かせる場合もあるという。終助詞のエッセンスは「話し手の態度の発現」にあるとし、特定の態度は、「イントネーションや語気にも反映される」と述べている。このように、終助詞のモダリティとしての位置づけは、ほぼ正確に鳥瞰できていると言ってよい。

終助詞をいずれのモダリティに帰属させるべきかの問題は芳賀（1953）で体系的に議論されている。芳賀は、ほぼ真偽性モダリティに相当する要素を「述定的陳述」（ないしは「述定」と呼び、ほぼ発話モダリティないしは関連性モダリティに当たる要素を「伝達の陳述」（ないしは「伝達」と呼んで区別した。前者は、「それに先行して客体的に表現された（中略）事柄の内容についての、話手の態度（断定・推量・疑い・決意・感動・詠嘆など）の

言い定めである」(p. 58)としている。他方、後者は、「事柄の内容や、話し手の態度を、聞き手(時には話し手自身)に向かってもちかけ、伝達する言語表示である」(同頁)と規定し、告知・反応を求める・誘い・命令・呼びかけ・応答などが含まれるとみなしている。芳賀はモダリティ(=「陳述」)のシステム全体を問題にしているので、終助詞の位置づけに議論を終始させているわけではないが、目下は終助詞に注目すると、「述定的陳述」には「か」、「わ」や「なあ」が含まれる。また、「伝達の陳述」には「よ」や「ね」が含まれる。こうして、例えば、「雨が降るわよ」のような文は、「雨が降る」に託された〈断定〉と「わ」に託された〈感動〉に「よ」の表す〈告知〉が付加されたものと分析される。また、もう一例挙げれば、「雨が降るだろうね」は、「だろう」に帰せられる〈推量〉と「ね」に帰せられる〈もちかけ〉とが複合化されたものと見る。

芳賀の枠組みに沿って終助詞を網羅的に分析した論究に佐治(1956)がある。佐治は、芳賀の「述定的陳述」の終助詞を「第二類(判断めあて)」とし、「伝達の陳述」の終助詞を「第一類(聞き手めあて)」とした上で、まず、「第二類」では、「不確かだという態度」を表す「か」と「確かだという態度」を表す「わ」、「とも」、「ぞ・ぜ」を区別している。さらに、この類のあとの仲間は、順に、確かだという気持ちが弱まると特徴づけ、結局、「わ」は〈聞き手をおしのける〉態度を、「とも」は〈聞き手を受け入れる〉態度を、さらに「ぞ・ぜ」は〈聞き手に押しつける〉態度を表すとみなしている。また、これらの「確かだという態度」を表す終助詞は、同時に「聞き手に対する働きかけをも含む」とも観察している。他方、「第一類」は、話し手の聞き手に対する直接的な態度を表すものとみて、「ね・な」は〈話しかけ問いかける気持〉を、「よ・や・え・い」は〈呼びかけ押しつける気持〉を、「さ」は〈突っぱなし放り出す気持〉を表示すると述べている。このような、終助詞の帯びる態度的意味の包括的な分析は、より本質的な機能の解明に大いに役立つが、新たな疑問も生ずる。例えば、佐治の言う「判断めあて」の終助詞と「聞き手めあて」の終助詞はそれほど截然と分けられるものか否かである。これらの二類が実は相互に浸透し合うものであることは、佐治も気づいていたと思われる。単純につきあわせても、「ぞ・ぜ」の〈聞き手に押しつける〉態度と「よ・や・え・い」の〈呼びかけ押しつける気持〉の表出態度には明らかな重なりが認められる。¹⁾ 本論では、「ぞ」、「ぜ」はそれぞれ「よ」、

「さ」に対応し、これらは優位性や仲間といった対人関係の要因によって区別されるべきものと考えたいが、このような見方は、佐治の粹組みの組みかえにつながる。

渡辺（1968）の終助詞の見方は、いささか佐治と異なる。「か」が〈訴え〉という「陳述」（すなわち本稿で言う真偽性モダリティ）を表すとしている点は、実質的に佐治と変わらないが、「さ」、「よ」、「ね」の捉え方が異なる。渡辺はこれらの終助詞はともに〈表出〉の「陳述」を表すものであり、「さ」は〈判断の抛棄〉を、「よ」は〈対象との直接的なつながり〉を、「ね」は〈話相手との直接的なつながり〉を表示するとしている。このような見解は疑問を誘発する。まず、「さ」の持つ〈判断の抛棄〉という性質について言えば、「何とかなるさ」のような発話においては、命題 p が真であるという判断は決して「抛棄」されているわけではないことは明らかである。話者は、「何とかなる」と判断したことについて責任を問われるであろう。「さ」は、ただ、 p の内容が（正確にいうと「何とかなるさ」と言う発話が）自明な情報を表していることを伝えているだけである。第二の疑問点は「よ」についてである。渡辺は、「桜よ！」のような呼びかけの「よ」を典型的な用法と考えているようであるが、むしろ「桜らしいよ」のような真偽判断を伴う場合を中心に据えるべきであろう。そうすると、「よ」は判断を伴うだけでなく、「対象」に対してよりもむしろ「話相手」との直接的なつながりを濃厚に持つことが確認できるはずである。そもそも、「桜よ！」のような一見対象にじかに向けられたかに見える発話も、実は「対象」と「話相手」とが一体化した特殊ケースに過ぎない。「対象」と言う概念は、少なくとも終助詞の特徴づけには無用であると思われる。

2.2. 終助詞の談話における位置づけ

終助詞が、先に述べたように、何らかの「話し手の態度の発現」に関わるという規定が正しいとすると、終助詞は発話場面において、すなわち談話の局面において、どのような位置を占めるかを考慮しないわけにはいかない。終助詞のモダリティ的性質を検討する際にはこのことはすでに十分踏まえられているはずであるが、ここでは、会話のやりとりにおける終助詞の相互交渉的側面についてのいくつかの特徴的な提案を批判的に考察してみたい。

まず、「情報のなわ張り理論」を基盤にした神尾（1990）の提案である。

神尾は、「情報のなわ張り」を、「話し手のなわ張り内」(A)、「聞き手のなわ張り内」(C)、「話し手および聞き手のなわ張り内」(B)、「話し手および聞き手のなわ張り外」(D)の四つに分割し、なわ張りと「ね」の関わりを述べている。「ね」の規定は次のようなものである。

- (1) 「ね」は話し手の聞き手に対する〈協応的態度〉を表す標識である。〈協応的態度〉とは、与えられた情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度である。

(神尾(1990:77))

一方、「ね」は次のような現れ方をする。

- (2) ちょっと、郵便局行ってきますね。(A)
 (3) 毎日よく降りますねえ。(B)
 (4) 君はさびしいらしいね。(C)
 (5) 吉田君、退院したらしいね。(D)

神尾は、「ね」は情報のなわ張りがBとCの場合には義務的に現れるが、AとDの場合には任意に現れると記述している。

神尾と類似した提案はMaynard(1993)によってなされている。Maynardは、“Relative Information Accessibility and/or Possessorship”という概念を用いて、話者・聴者のいずれが情報の利用可能性・所有の度合いが高いか注目し、Speaker-Exclusive (Sp-E), Addressee-Exclusive (Ad-E), Speaker-More (Sp-M), Addressee-More (Ad-M), Speaker-Addressee Same (Sp-Ad Same)のカテゴリーでの「よ」と「ね」の分布を観察している。これによれば、「よ」はSp-EおよびSp-Mに現れ、「ね」はSp-Eを除くすべてのカテゴリーに現れ、Sp-Mを別にして「よ」と相補的に分布するという。しかし、この分析は受け入れがたい。まず第一に、Ad-EないしはAd-Mには「ね」は現れうるが「よ」は現れ得ないとしている根拠についてである。次の例を見られたい。

- (6) 田中さんは行きますか*よ/ね。

(7) 誰が行きますか*よ/ね。

上の文は質問を表すから、問題の情報の所有は明らかに聴者にある。しかし、「よ」が排除されるのはこのこととは無関係であることは次の例で見て取れる。

(6') 田中さんは行くのかよ/ね。

(7') 誰が行くのかよ/ね。

「よ」が(6)や(7)で取まりが悪いのは、おそらくは丁寧さのスケールの不適合によるものであろう。「よ」は「ね」に比べて対人関係的距離が近すぎて、「ます」のような丁寧体となじみにくいのであろう。Maynardの第二の問題点はSp-Eのカテゴリーにおける「ね」と「よ」の使い分けについてである。次の例を参照。

(8) 来週は大阪へ行きたいんですよ/*ね。

(8)は、会話を切り出すときに用いられた発話だとして。この場合、「よ」はよいが「ね」は不適格だとされている。この判断は、おそらくイントネーションを十分考慮しなかったためであると思われる。事実は、(8)においては、「よ」は下降調で、「ね」は上昇調で、それぞれ自然に用いられる。(抑揚型を交換すると、切り出しの発話としては不自然になる。)抑揚型がもたらす発話のニュアンスの違いは別途に説明しなければならないが、終助詞の共起の問題としては、特に「ね」を排除すべき理由はない。

神尾が「ね」の規定に用いた〈協応的態度〉は、「情報」および「聞き手への働きかけ」の二つのキー概念から成っていたが、Maynardもこれを継承している。それは次のような規定に現れている。

(9) The sentence-final particle *yo* in the [X *yo*] structure is a marker by which the speaker demands the listener's communicative behavior of "paying attention to [X]" by foregrounding [X].

(Maynard (1993: 208))

- (10) The sentence-final *ne* in the [X *ne*] structure is a marker by which the speaker solicits the addressee's confirmatory attitude and/or requests the addressee's transfer of information, even if it may only be in the form of recognition. . . . Interaction is foregrounded here and the information is backgrounded. (*ibid.*)

結局、「よ」は「情報」が前景化され「聞き手への働きかけ」が後景化されるのに対して、「ね」は「聞き手への働きかけ」が前景化され「情報」が後景化されるという。「よ」の性格づけはひとまずこれでよいとしても、「ね」の「情報」に付与される重みは必ずしも「聞き手への働きかけ」に比して劣るとは言えないであろう。例えば、先の(2)や(8)では、少なくとも同等の比重が「情報」にかけているとみてよかろう。

神尾の理論に対抗する形で提出されたのが片桐(1995)の対話調整モデルである。これによれば、「よ」「ね」は情報共有を促進する対話調整の機能を果たすと考え、次のような規定を行っている。

(11) 終助詞ヨ・ネの情報受容表示機能

ヨは当該の情報を話し手が自分のものとして受容していることを示す。それに対してネは話し手が何らかの情報源から当該の情報を得たが必ずしも受容できていないことを示す。

(片桐(1995:42))

片桐は、上のような違いによって次の用例における「よ」と「ね」の差を説明している。

(12) a. ほら、田中さんが来ましたよ。

b. ほら、田中さんが来ましたね。

(*ibid.*, 43)

(12) は、いずれも話者は発話場面を情報源として「田中さんが来た」という情報を得ているが、(12a)ではその情報を自分で受容しているものとして提示し、(12b)では受容していないものとして提示している、と説明される。これは首肯しがたい。(12)の二文に情報の受容の仕方にいささかで

も差があるとは思えない。いずれの場合も、発話に先立って「田中さんが来た」という想定は話者の認知環境に登録されていなければならない。異なるのは、この想定がまだ聴者の想定になっていないかどうかである。片桐は、対話調整モデルの方が神尾のような情報帰属モデルよりも優れていると述べているが、これも疑わしい。神尾の枠組みでは、(12a)は「田中さんが来た」という情報が話し手のなわ張りに属し、(12b)は話し手と聞き手のなわ張りに属するとして単刀直入に説明できるからである。

3. 終助詞の関連性モダリティにおける位置づけ

前節では、先行研究における終助詞の分析の問題点を検討した。本節では、これらの困難点を克服すべく、関連性モダリティという新たな視点からの接近を試みる。

関連性モダリティは、発話においてイントネーションが表示する内容として河野(1994, 1995, 1996)によって提案されたものである。これによれば、発話は下降調または上昇調の抑揚を帯びることによって、例えば、それぞれ次に示すような関連性判断(I, IIの場合)ないしは関連性意識の判断(III, IVの場合)を表出する。(なお以下では、Uは「発話」を、Cは「発話の構成素」を、Rは「関連性モダリティ」を表す。)

- (13) I. I say that U (or C) is R.
 II. I ask you whether U (or C) is R.
 III. I say you are aware that U (or C) is R.
 IV. I ask you whether you are aware that U (or C) is R.

すなわち、下降調は、(I)ないしは(III)のように、発話(の構成素)が関連性をもつことを、ないしは関連性をもつことを相手が意識していることを〈主張〉する行為を表し、上昇調は、(II)ないしは(IV)のように、発話(の構成素)が関連性をもつか否かを、ないしは関連性をもつことを相手が意識しているか否かを〈質問〉する行為を表すと規定した。この規定は、英語を念頭に置いたものであったが、そっくりそのまま日本語についても当てはまるとしたい。

終助詞とイントネーションとの関わりは後で考察するとして、今見ておき

たいのは終助詞そのもののモダリティ R との関わり方である。発話の関連性判断・関連性意識の判断を行う際、発話が話者・聴者のいずれにとって関連的であるかに関して、「話者に関連的」(S-R)、「聴者に関連的」(H-R)、「話者・聴者に関連的」(SH-R)の区別がつけられる。²⁾この区別を表示するのが終助詞である。「寒いわ」のような「わ」は詠嘆を表し、相手にとってよりもまず自分に関わりのある事柄を述べるものであるから、S-R を表示するものとみなせる。「寒いよ」のような「よ」は相手にとって未知の、したがって最も関連性の高い情報を提示するものであるから、H-R を表示する。また、「寒いね」における「ね」は話者・聴者の双方にとって関わりのある事柄を述べるものであり、SH-R を表示する。さらに、R の様態には否定の対応形があり、「話者に非関連的」(~S-R)、「聴者に非関連的」(~H-R)、「話者・聴者に非関連的」(~SH-R)のように分割される。このうち、~S-R を表すのは「寒いとも」に見る「とも」であると考えられる。話者にとっては自明の、したがって関連性がきわめて低い、情報であるとみなす態度である。一方、「寒いさ」に現れた「さ」は、話者・聴者の両者にとって自明な情報を表すとみなせるから、~SH-R の場合を構成する。(なお、~H-R に当たる終助詞は空白になっているように見受けられる。)以上のことをまとめて示せば次のようになる。

(14) 終助詞の関連性モダリティのモード

わ：	S-R	とも：	~S-R
よ：	H-R	—：	~H-R
ね：	SH-R	さ：	~SH-R

なお、先に述べたように、「ぞ」は「よ」と同位にあり、「ぜ」は「さ」と同位にあるとし、それぞれは対人関係的要因によって区別されるものとする。

さて、終助詞は一つの発話に「寒いわよ」、「寒いよね」、「寒いわよね」のように連続して現れることがある。この場合の終助詞は、一見発話の中心的成分である「寒い」にそれぞれの終助詞が平面的に並置されているように見えるかもしれない。しかし、事實は、次のような階層性を成す。³⁾

(15) [[[寒い]_{u₀} わ]_{u₁} よ]_{u₂}

- (16) [[[寒い]_{U₀}よ]_{U₁}ね]_{U₂}
 (17) [[[[寒い]_{U₀}わ]_{U₁}よ]_{U₂}ね]_{U₃}

つまり、(15)においては、「わ」は U_0 の情報内容が話者に関連的であることを述べており、「よ」は「わ」によって表されるモードを含む U_1 全体が相手にとって関連的であると述べている。同様に、(16)では、 U_1 は U_0 が聴者にとって関連的であることを伝え、 U_2 は U_1 のそのような情報内容が話者・聴者の双方にとって関連的であると述べている。(17)も階層が増しただけで、同様である。注意しなければならないのは、それぞれの終助詞はすぐ内側の U の関連性モダリティと関わるのであって、隣接する U を飛び越していきなりもっと内側の U と関わることはないことである。上に見た終助詞の階層性は、〈一つの U は一つの、そしてただ一つの終助詞を含む〉というきわめて一般的な事実を陳述したのものである。

終助詞の階層性と関連して、「ね」は共起する U に興味深い制限を課す。例えば、「行きなさいよね」における「ね」は「行きなさいよ」という、話者の考えをじかに表現した発話、すなわち Sperber & Wilson (1986) の言う「記述的な」(‘descriptive’) 発話と共起している。(16) はもう少し複雑であるが、一応は「記述的」としてよい。しかし、次のようないわゆる心理文を伴う場合は様相を異にする。

- (18) [[[[あなたはさみしい]_{U₀}わ]_{U₁}よ]_{U₂}ね]_{U₃}

心理文は話者の内的感情を表すものであり、したがって U_0 は独立の発話としては不整合文となる。また、この性質は、「わ」を伴う U_1 にも、さらに「よ」を伴う U_2 にも引き継がれる。ところが、 U_2 に「ね」が付随した U_3 は全く自然な発話である。これはどうしてであろうか。問題の鍵は U_2 およびそれより内側の U の特質にある。 U_0 から U_2 までの U を、聴者が抱くであろうと予測される考えを話者が解釈したもの、すなわち Sperber らの言う「解釈的な」(‘interpretive’) 発話とみなすのである。⁴⁾ U_3 は全体として「『私はさみしいよ』とあなたは思っているようですが、そうですね」というほどの意を伝えるものと見るわけである。 U_2 までの発話の広がりには「解釈的」であるから、下地になっている、聴者に予測される考えとは様々なずれが生じ

ている。まずは、主語の人称の変換である。第二に、「わ」の添加である。(今はわかりやすさのために、話者は女、聴者は男としておく。)さらに、「あなたはおさみしくいらっしやるわよね」のような発話の構成では、丁寧さや敬語成分が付加される可能性がある。

終助詞は、イントネーションを帯びることによってはじめて完全なものとなる。そこで、終助詞の議論のしめくくりとして、抑揚との関わりについて述べる。抑揚は、(13) で見たように、関連性判断・関連性意識の判断の〈主張〉と〈質問〉とに関わり、〈主張〉は下降調で、〈質問〉は上昇調で表出される。また、それぞれの終助詞は(14)に示したような関連性モダリティの様々なモードを表し分けるものであった。したがって、個々の終助詞が下降調・上昇調のいずれかを伴って表される総体的な発話態度は、(13)のRに(14)のそれぞれのモードを代入することによって得られる。例えば、「寒いよ」の下降調の「よ」は(13)の(I)ないしは(III)でRがS-Rの場合を表す。また、上昇調の「よ」は、Rのモードは変わらないが、「あなた寒いのか?」—「うん、寒いよ」のような発話では(II)のように自分の発話が相手にとって関連的かどうかを尋ねる発話になろうし、「コート着ていかないと、寒いよ」のような場合には、(IV)のように相手の注意を喚起し、自分の発話が相手にとって関連的であることを相手が意識しているかどうかを尋ねる発話になる。他の終助詞についても全く同様であるが、念のため「ね」と「わ」の事例を添えておく。まず、「ね」のモードは常にSH-Rである。下降調の「ね」は、問題の発話が双方にとって関連的であること、ないしは双方にとって関連的であるということを相手が意識していることを〈主張〉する態度を表す。一方、上昇調の「ね」は、「それじゃ、外は寒いね」のように(II)の形で関連性を確認したり、「あなた、また遅刻しましたね」のように(IV)の形で関連性意識の判断を求めたりする。⁹⁾次に、S-Rのモードを占める「わ」について検討しておこう。「わ」は、下降調の場合は男女いずれも使用しうが、上昇調は女性に限定される。そのわけは次のように説明できる。まず、「寒いわ」のような「わ」が下降調を伴う場合は、「寒い」という話者に関連的な情報内容は感慨として提出される。これは先の(I)の場合である。ところが、上昇調の場合には、話者に関連的な情報に聴者の意識が向けられているかどうかを問いかける形を取る。これは、言うまでもなく、先の(IV)の場合に当たる。この問いかけの成分が女らしさや

コケットリーを生み出すのである。このように、個々の終助詞の違いは関連性モダリティのモードに帰着させることができ、終助詞の帯びる抑揚は終助詞とは独立に作用するものとみなすことができる。⁶⁾ 関連性モダリティは、終助詞のモードと抑揚とが連携してはじめて実現される。

4. 結論

第2節で見たように、先行研究においては、おおむね、終助詞は、真偽性モダリティに属すものとそれ以外のモダリティに属すものとに分散されており、共通の特性は抽出されていない。また、個々の終助詞に帰される発話態度には様々な不整合が見られた。一方で、終助詞の相互交渉的役割に注目し、発話の表す「情報」のありよう（例えば、その帰属の仕方）を問題にし、その「情報」をめぐってどのように「聞き手への働きかけ」を行うか（例えば、〈協力的態度〉）を解明しようとした研究もあるが、観察が断片的であり、終助詞の体系全体を見通したものではない。本論では、（真偽性モダリティを表す「か」を除いて）終助詞は関連性モダリティの種々のモードを表し分けるものとした。すなわち、発話が話者・聴者のいずれにとって関連的か、ないし是非関連的かを区別するのが終助詞の機能とみなした。さらに、終助詞はイントネーションと相互作用して、発話の関連性判断ないしは関連性意識の判断を行うものとした。このような終助詞の位置づけによって、「情報」と「聞き手への働きかけ」との間に揺れ動いているかに見える終助詞の本性が浮き彫りになったと信ずる。

注

- 1) そもそも、「よ」の類の終助詞は佐治のような分析では捉えきれないと思われる。例えば、基本的に佐治の分析を受け入れている上野（1971）では、*'yo implies the speaker's emphasis in giving a piece of information to the addressee'* とする一方で、*'With an imperative sentence it softens the imperative nature of the sentence'* (p. 109) のように矛盾した特徴付けを行っている。
- 2) 本論の「話者に関連的」、「聴者に関連的」、「話者・聴者に関連的」に近似した見方が北川（1984）によって提出されている。北川は、「な」は〈発言が一人称事項に関することを表示する（単数、複数の別は問わない）〉(p. 32) とし、「ね」は〈発言が二人称事項に関することを表示する〉(p.34) と規定

している。こうすると、「な」は本論の「話者に関連的」(単数の場合)か「話者・聴者に関連的」(複数の場合)に当たり、「ね」は「聴者に関連的」に当たると解釈できる。しかし、すぐ後で明らかになるように、本論では「な」や「ね」をこのようには規定しない。また、北川は「人称」が関わるのは「な」と「ね」に限定しているが、本論ではすべての終助詞が先の三分割に関わると考える。

- 3) それぞれの終助詞の現れうる発話内での相対的な階層は決まっている。例えば、(17)の「わよね」の連続はよいが、それ以外の連鎖(例えば、「よわね」、「よねわ」、「ねわよ」等々)は許容されない。いずれにせよ、S-Rの「わ」、H-Rの「よ」、SH-Rの「ね」のように関連性の波及する領域が拡大するように情報が提示されることは興味深い。
- 4) 英語の心理文にも日本語と並行的な現象がある。例えば、英語においても‘You are lonely’は単独の発話としては容認されないが、‘You are lonely, aren’t you?’や‘So you are lonely’のような発話は全く自然である。このような適格な心理文は「解釈的な」発話ゆえに許されるものと考えたい。
- 5) Cook (1992)は「ね」が‘Affective common ground’なる直接的な指標の意味を表し、これから推論によって様々な間接的な指標の意味、例えば‘Requesting confirmation,’ ‘Getting attention,’ ‘Introducing a new topic in conversation,’ ‘Keeping the floor,’ ‘Socializing children,’ ‘Mitigating face-threatening acts,’ ‘Making intimacy,’ が引き出されるとしている。本論では、Cookの言う直接的な指標の意味はSH-Rというモードに包摂させることができるし、種々の間接的な指標の意味はこのモードと関連性判断・関連性意識の判断の〈主張〉または〈質問〉との相互作用の結果もたらされるものと考ええる。
- 6) 終助詞が重層的に用いられる(15)~(17)のような発話においては、示差的な抑揚を帯びるのは一番外側の終助詞である。すなわち、(15)では「よ」、(16)、(17)では「ね」である。(このことは上昇調が内側のUには現れず、一番外側のUにのみ現れることによって確かめられる。)こうして、最上位のUが(13)の関連性判断・関連性意識の判断の対象となる。それより下位のUの「関連性」は前提になっているものと考えたい。すなわち、(15)では U_1 の‘that U_0 (or C) is S-R’が前提を構成しており、(16)では U_1 の‘that U_0 (or C) is H-R’が前提を成しているとする。(17)では U_1 及び U_2 が同様の前提を形成しているとする。

参考文献

Cook, H. M. (1992) “Meanings of Non-referential Indexes: A Case Study of the

- Japanese Sentence-final Particle *Ne*,” *Text* 12 (4), 509–39.
- 芳賀綏 (1953) 「“陳述” とは何もの?」, 『国語・国文』第 23 号, 47–61。
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』, 大修館, 東京。
- 片桐恭弘 (1995) 「終助詞による対話調整」, 『言語』第 24 卷, 第 11 号, 38–45。
- 北川千里 (1984) 「発言の階層構造と『ことば』の主体性」, 『日本語学』第 3 号, 31–42。
- 河野武 (1994) 「『関連性』とイントネーション」, 『大妻レビュー』第 27 号, 75–89。
- 河野武 (1995) 「『関連性』とモダリティ」, 『大妻レビュー』第 28 号, 75–85。
- 河野武 (1996) 「Bolinger の Profile 理論の再分析—関連性モダリティの視点から」, 『大妻女子大学紀要 (文系)』第 28 号, 39–54。
- Maynard, S. K. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*, John Benjamins, Amsterdam.
- 佐治圭三 (1956) 「終助詞の機能」, 『国語・国文』第 26.7 号, 23–31。
- 佐久間鼎 (1952) 『現代日本語の研究』, 厚生閣, 東京。
- Sperber, D. and D. Wilson. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Basil Blackwell, Oxford.
- Uyeno, T. (1971) “A Study of Japanese Modality: A Performative Analysis of Sentence Particles,” unpublished Ph. D. dissertation, University of Michigan.
- 渡辺実 (1968) 「終助詞の文法的位置—叙述と陳述再説」, 『国語学』第 72 号, 127–35。

